

I.W.A.事務局長 マグダレナ L.ゴドイ(通称マゲ)

### パンデミックのはじまり

フィリピン政府がECQ（強化されたコミュニティ隔離措置）を宣言したのは2020年3月16日からで、首都圏では5月31日まで続きました。その後、6月1日からはGCQ(修正・強化コミュニティ隔離)となりました。2019年に発生したCOVID-19(コロナウイルス)の感染爆発にあたり、行動規制を伴うロックダウンです。追加措置として不要不急のビジネスの規制、陸路空路の旅行禁止や外出時間制限が設けられました。様々な場所で、



立入禁止 ロックダウン



特に市や州をまたぐ場所では、警察や軍の検閲があり移動の目的を聞かれます。

公的イベント禁止、商店街や学校（大学も）閉鎖、皆が自宅待機となるなか、各家族には「自宅隔離パス」が配布され、家族の1名のみが必需品の買いだしの為に外出が許可されます。それには世帯主名が書かれ、行き先々

で見せなければなりません。エッセンシャルワーカーは「通行許可証」がもらえます。規則を破れば即、連行されるのです。家にいるしかない人々にとって、まさに「世界が突然止まった」ようでした。友人や家族、外界から切り離された暮らしは本当に辛いものです。でもステイホームは自分や他者のためであり、ウィルスの拡大を防ぐ

ことで祖国をまもることに繋がると信じました。



自宅隔離パス



許可証を見せる人

時が経つにつれ、辛さは増しました。陽性者数が増えつづけ、食べ物に困るようになりました。失業した日雇い労働者の生活を想うと辛く、病院や銀行、薬局、スーパー等、社会のニーズで働かなければならない人々を気の毒に思いました。見えない敵（コロナウィルス）と闘う日々。辛かったのは、病院が満床になり、医師、看護師不足のため、駐車場に設置された仮設テントで亡くなる方々がいたことです。陽性が判明すると家族からも隔離されます。そのため、具合が悪くても自宅で療養しているほうがまだ、家族と離れるほうが辛いと思う人が多いようです。危険なウィルスだとしても、そんなわけで感染者数は何千から何万人へと増加しました。皆、恐れを抱きながら生き延びていかなければならない日々でした。



立入禁止コロナ陽性隔離区域

政府はコロナが貧困層に打撃を与えている現状に鑑み「救済プログラム」を導入しました。対象者は主にスラム地区に住み仕事もない家族で、8000ペソ(約16000円)が支給されました。DSWD(社会福祉省)の推薦が必要で、民間会社に勤めている人たちは除外です。地方自治体も食料パッケージ(米と缶詰)を配布しました。この状況から多くの学びがありました。ひとりが皆を思いやる心、身の周りのすべてを大切に思うこと、そして自分のコミュニティをまもること。コロナ禍で自分の生活が時限爆弾のように今にも吹っ飛ぶのではと心配し、恐怖を抱きながら暮らすのは、本当に胸が痛みます。子どもたちと描いていた生活ではありません。でも、自分と愛する家族、友人が皆、安全に暮らせるように注意深く、感染対策をきちんととっていかねばならないと思います。最後に、自分と向き合い祈りをささげること。現時点では私たちができることは限られているので、あとは神様に委ねることにしましょう。



コロナ病床満床



## コロナウィルスの教育への影響

コロナ禍は世界の経済や社会そして政治にも未曾有の影響を与えました。健康問題というだけでなく、教育現場にも大きな危機を与えたのです。フィリピンでは、ロックダウン措置が厳しいため、子どもたちは学校に通うことができませんでした。2020年3月に閉鎖されましたが6月には、ワクチン接種が可能になるまで再開できないとの事でした。この月にはじまるはずだった学校は閉じられたままでした。皆がそんな状況でどうしたらいいのか思案していましたが、一番大切なのは、子どもたちの安全と健康だという事で一致しました。

思案の末、教育省は、リモート授業を導入すべきだとの決定に至りました。多くのフィリピン人がパソコンもインターネット環境も整わないなかで、公立学校の生徒にはとても難しいことです。学期開始といっても教室での対面授業という意味ではありません。リアルに登校しての授業は、保健省、特定感染症対策委員会、大統領府によって作成されるガイドラインに従うことになります。



リモート授業中

学校がモジュール（プリント学習）を作成し、生徒が家で勉強するという方法で始まりました。同時にインターネット（google meet や zoom）でも展開できる方法を模索しながら。



上質紙寄付 ムーンウォーク小学校

タブレットを贈ることができました。また2回目の寄付金により「感染防止キット」（消毒用アルコール、マスク、フェイスシールド）を配布しました。

そんなわけで、2020年は通常より4か月も遅い9月から授業がはじまりました。親も教師も、遠隔学習でも、学習の機会がほしいと望んでいたのが喜びました。パンデミックの間、将来的にはオンライン授業がいいけれど、どんな方法でも教育の機会を得る権利のある子どもたちにとっては大切なのです。I.W.A.(Ikuekai Welfare Association)は、日本の寄附者の方々のおかげで、モジュール学習の印刷用の上質紙や、需要の高い生徒（聾学校）に



感染防止キット寄付

ウィルスは変異し、デルタ株やオミクロン株となり、この2年間ロックダウン制限が続いています。オンライン授業は続けられ、18歳以下の子どもたちは家の外に出られません。他の組織と同様、私たちがコロナ禍で仕事をするのが難しい状態を経験しています。

私は（首都圏マニラに隣接する州）カビテに住んでいて、事務所のあるラスピニャスに通勤することができませんでした。育英会の仕事が「不要不急」だとみなされたからです。政府の方針に従って3月から5月は、インターネットや携帯電話で先生たちや日本の育英会と連絡を取るしか方法がありませんでした。

2020-2021の前期奨学金はコロナ禍の学期遅れのため9月に給付しました。通常は、学校の教室に、各グループの生徒たちを招集して配布を行います。パンデミックのため、子どもたちは外出できないので、奨学金を受け取りに来るのは親です。

フィリピンではいまだに、地域封鎖がありますが、この悪条件にもかかわらず、助け合って暮らしている様子を見ると元気がでます。いまやっとワクチンが実施されるようになったので、感染者数も減少し子どもたちが学校に戻り、多くの人々が前の生活に戻る日も遠くないのではと願っています。

決してあきらめず今日が辛く、明日改善しなくても、明後日こそは明るい光に満ちた日になりますようにと祈っています😊😊😊



奨学金を受取りサインする母親

### 著者プロフィール

マグダレナ L.ゴドイ I.W.A. 事務局長



育英会が任意団体として発足当初(32年前)からマニラで活動を支える。今は一人で全ての事務・運営をこなす4児（全員男子）のママ。優しいパートナー、エドウィンさんに支えられ今日もマニラの子どもたちのためにがんばっています！